

徳川家霊廟奉献石燈籠の成立と展開(中―2)

伊藤 友己

前回までで厳有院廟献納の石燈籠について考察を終えたつもりでしたが、全体の献納数や献納実態について史料を元にもう少し判ることを書いてみます。常憲院廟に関しては、『上野東叡山燈籠建場図』によって灯籠の配置、奉献大名が判明していますので、大猷院廟から常憲院廟までのつながりの部分を出来るだけ正確に追ってみたいと思います。

5 燈籠配置

前回厳有院霊廟の造営の過程については『鈴木修理日記』を元に紹介してきました。葬儀については浦井正明氏の『上野寛永寺將軍家の葬儀』に詳しく描かれています。

東京都立中央図書館の木子文庫には延宝八年申八月 甲良豊前 と書かれた『嚴有院様御佛殿其外仕様書之覚』が納められていて、厳有院御廟所を構成する諸建築の仕様がまとめられています。詳細については伊東龍一氏が『上

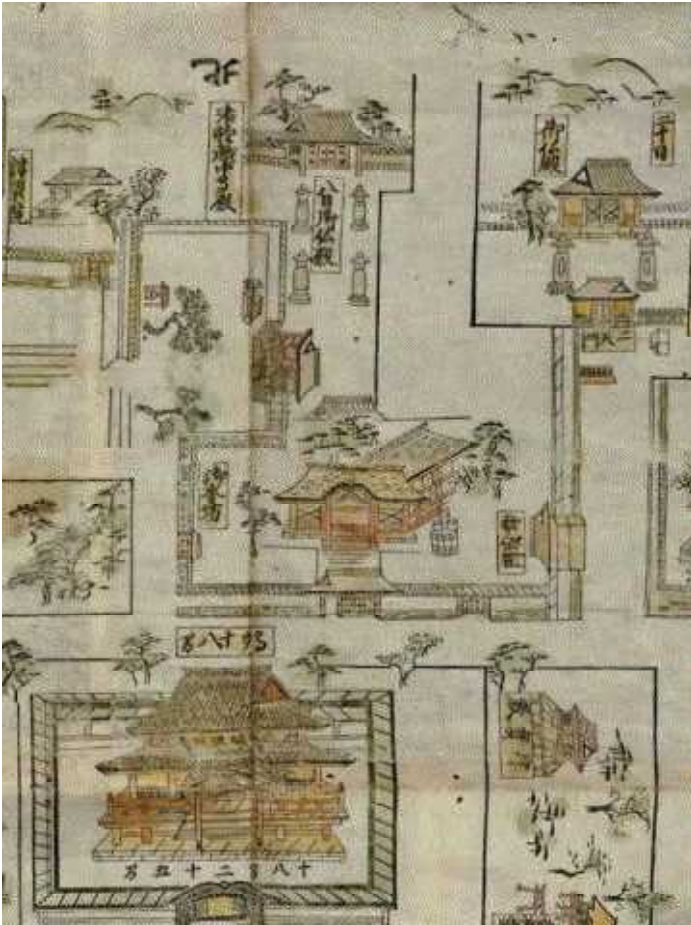


図1 寛永寺古図

野の大猷院霊廟と厳有院霊廟(第一次)について』の末尾に表の形式で要約しています。

しかし、霊廟全体の配置や構造を示す創建時の絵図は残っていないように思われます。

図1は東京国立博物館所蔵の寛永寺古図で、常憲院霊廟が描かれていないので宝永六年以前の状態を描いた物と思われます。

ではこれが延宝九年創建時の状況を描いた物かといえば、必ずしもそうとは言えない事情があります。元禄十一年五月の火災により厳有院御仏殿が焼失してしまうからです。

『常憲院殿御實紀』には、創建なった寛永寺中堂の上棟、地鎮の式典の終わった翌日、元禄十一年九月六日の項に

數寄屋橋の邊南鍋町の商家より火起り。おりふし南風はげしく。たちまち四町ばかりひろがり。大名小路にうつり。諸大名の邸宅薨をつらねて焼きたち。北をさして殿上人の旅館もやけ。柳澤出羽守保明が邸に及びしかば。かしこの行殿并に傳奏旅館。上野淺草寺等を防げとて。大久保隠岐守忠増はじめ。あまたの輩に命ぜられ。人数ひきつれ防ぎしかば。行殿はのこりしが。その他みな／＼火うつり。横ざまに二、三十町焼ゆき。戌の時ばかり東叡山に及び。嚴有院殿霊廟。法親王本坊はじめ。寺院あまた焼けしが。中堂のあたりはやう／＼ふせぎとめて千住にいたり。子の時ばかりに暴雨ふり出て焼やみたり。

と記録しています。中堂は幸いに防ぎ止められますが、寛永寺の本坊をはじめ、諸寺院それに厳有院霊廟が焼失してしまします。

罹災した柳沢保明(吉保)は『樂只堂年録』に、切迫した状況を次のように記録しています。

一、今日四つ過、鍋町の民家より出火す、南風はげしく、猛火馳かごとくにて、延て吉保が屋敷の内に及ぶ、(中略)、其外敷多來り救へども、風はげしくて、安通・信豊・采女定直が妻の居所、并に家臣の舍屋、悉く焼亡す、黒田豊前守直重が亭も災にかゝれり、火さかんにして、御殿に及びなんとせし時に、大久保隠岐守忠増が働、列にこへたり、是によりて、御殿恙なく、吉保が居屋敷も、災を脱かる、戸田内藏助光賢、精力を勵すによりて、与力壹人・纏持壹人死す、吉保、今日四つ時、登城して、七つ過退出す、日暮れに及んで、護持院あやふかりしによりて、また登城して、五

つ過退出す、夜深て火やまず、東叡山に及ぶによりて、又四つ時、登城して九つ過退出す、嚴有院様の御霊屋も焼亡し、その外に、寺中あまた焼失す、千壽の邊に至りて止む、

嚴有院靈廟、寛永寺諸堂の造営を差配する鈴木修理は、この火災で「自分屋舗」を焼失しています。『鈴木修理日記』の記述は次の通りです。

一巳刻、数寄屋橋外鍋町仕立屋方出火、日本橋迄西側不残、丸之内大名小路東側道三橋限り、常盤橋外伊勢町限り、東ハ横山町迄神田筋不残、柳原・雉子町、昌平橋方天神下・上野山下坂本通り、下谷・浅草・千住口迄焼失、老石橋・新シ橋・白銀丁筋橋共不残焼落ル、自分屋舗七ツ半時焼失、自分子共孫市方江立離、同八日方本庄下屋舗江引越罷在。

翌七日、戸田山城守忠昌が靈廟構造の總奉行を仰付けられますが、ここでは鈴木修理の動きを追ってみます。

八日 己卯

一巳刻登城、午刻退出。

一明ケ七ツ半時、三郎左衛門殿（作事奉行 小幡三郎左衛門）方手紙来ル、焼跡絵図仕、差上可申由申来ル、則刻申付ル、九日四ツ時出来、御城江持参致ス。

九日 庚辰 終日雨

一巳刻、御絵図出来、登城、棟梁三人、召連出ル、午后刻退出。

十三日 甲申 雨天
一巳刻、三郎左衛門殿江寄合ニ参、嚴有院様廻廊・玉籬・平唐御門仕様帳之写持参申

鈴木修理は寛永寺内の焼失地域の絵図の作成を命じられ、翌八日作成された絵図と棟梁を連れて登城し打ち合わせを行います。造営は嚴有院仏殿と寛永寺本坊について行われ、嚴有院仏殿については創建時の仕様帳を元に再建築が練られることとなります。仏殿にあった嚴有院の「神位」は左隣に在った津梁院に移されていました。

造営は年をまたいで急ピッチで進められ嚴有院仏殿は、翌元禄十二年二月廿九日に上棟、三月七日に地鎮、正遷座が行われます。『常憲院殿御實紀』の記事を引いておきます。

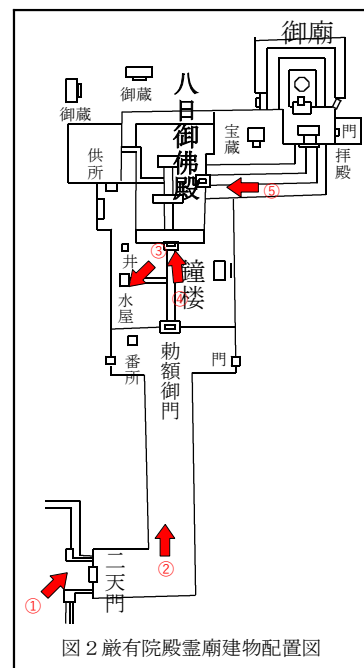
東叡山 嚴有院靈廟地鎮安鎮、日光門跡公辦法親王執行あり。よつて高家品川豊前守伊氏御使し。また正遷座により。阿部豊後守正武代参す。戸田山城守忠昌始め例の諸有司まかりむかふ。（日記。）

『鈴木修理日記』には「御地鎮・御安鎮之記」が納められていて、式の次第が詳しく記録されていますが、その後に面白い記事が在ります。

七日申后刻、津梁院ヨリ先、勅額御門ノ外、御飯屋エ御忍ノ御遷座、御飯堂ヨリ勅額御門左右御本堂マデ白幕張之、筵道地布三通敷之、二天門ソト、御先手近藤源左右衛門驚（警）固、勅額御門ソト、御持筒松平半左右衛門警固、但忍ノ御遷座之内ハ御鉄炮計鋸之、与力同心其外払之、御遷座以後与力同心最前ノゴトク驚（警）固ス、（中略）御名代阿部豊後守、直垂着セラ、御供所ニ待合有之、酉之刻ニ乃デ御門跡御参堂、御飯屋ニワイテ暫御法事有之、今朝之式ノゴトク、楽人音楽ヲ奏シ、衆僧御案ヲ供奉、御本堂エ正遷座ナシタマツル、

本来津梁院から遷座してくる「神位」を事前に勅額門外の御飯屋へお忍びで遷座しておき遷座式では、その御飯屋から「神位」を移したことになります。なおこの警護の対象には「二天門」、「勅額門」の記述が見えますので、九月の火災では「二天門」、「勅額門」は罹災しなかったことが判ります。つまり創建時の構造を変えずに御仏殿と御仏殿周りだけを再建した事になります。

前にこの稿の（上）で、佐藤左氏の『大日本建築全史』の付図として享保五年以前の寛永寺徳川家靈廟三代の配置図を模刻したものをご紹介しましたが、嚴有院の靈廟部分だけを部分拡大図として掲げてみます。



図の中に丸数字で示したのは『鹿鳴館秘蔵写真帖』の中に残された明治維新直後の嚴有院廟の写真です。矢印はカメラの撮影方向を示しています。

写真①を元に厳有院霊廟内の灯籠配置を考えてみることにします。



写真①二天門



写真③水盤舎



写真②勅額門前



写真④中門前



写真 6 昭和 17 年の勅額門内の状況



写真⑤仕切門

写真①は二天門前から霊廟方向を撮った物ですが、内側に石灯籠が見えています。

写真②は二天門を入った所から勅額門前までを撮った物ですが、左右に石灯籠が並んでいて、この二枚の写真から、逆L字形に石灯籠が配置されていたことが判ります。この写真は明治期の物ですから厳有院霊廟域には文恭院、俊明院へ献納された灯籠も配置されています。

写真③は中門前から水盤舎を撮しており、写真④は鐘楼の前から中門方向を撮っています。二枚の写真から水盤舎の周りから中門までビッシリと銅灯籠が置かれていたことが判ります。鐘楼周りにも銅灯籠が埋め尽くされていた物と思われます。

勅額門を入って内側左右は、常憲院の霊廟以降から前田家の指定席になります。厳有院廟で前田家がどの位置に灯籠を配置したかを示す資料は在りません。大猷院では唐門前、御三家と越前松平家の次の位置左右に置かれていました。

写真⑤は御廟前から仕切り門方向を撮った物です。仕切門は拝殿と霊廟域を隔てる門で、日光の大猷院廟では奥院入口に皇嘉門が置かれその門前左右に老中で造営の惣奉行を務めた酒井忠勝の灯籠が配置されました。

奥院内には無銘の三対の銅灯籠が置かれています。



写真7 洪沢庭園内灯籠

ところで写真6は、田邊泰氏の『徳川家霊廟』（昭和十七年 彰国社）に納められた写真ですが、勅額門内の水盤舎前から撮した物と思われまゝ。写真③と比べると、多くの銅灯籠が石灯籠と入れ替わ

る様に置かれています。寛永寺の銅灯籠は今大倉集古館に水戸家の献納した物が、厳有院、常憲院各一基づつ。洪沢庭園に紀州家の徳川治貞が浚明院に献納した物が残っているだけで、後は焼失した上野大猷院廟の灯籠と伝えられる両大師堂前の大型の灯籠（今二基が根本中堂前に移設。）を残すのみです。尚大猷院廟の銅灯籠は石塚雄三氏のご努力により他に数基確認されています。香取秀真の『江戸鑄師銘譜』には次の様な記載があります。

六二 松田勘平栄清

（五か）

◎厳有院殿寶前銅燈籠 延宝九年辛酉三月八日「一六八一」
紀伊國主正三位行權中納言源光貞。治工松田勘平栄清。（今村繁三氏庭前）
案ずるに、四代將軍家綱の廟上野第一靈屋には、今銅燈籠一もなし。維新の際紛失せるものか。
水戸光圀が四代廟に獻納のもの、大倉美術館に一本あり。
宇田川藤四郎次重の作なり。

一四〇 宇田川藤四郎重次

◎常憲源公靈廟前庭銅燈台貳樹 宝永六年己丑正月十日「一七〇九」
權中納言從三位源綱條肅具 治工宇田川藤四郎重次。（今在大倉美術館）

松田勘平栄清の項にある厳有院殿寶前銅灯籠に関する記載は、少し複雑です。

『江戸鑄師銘譜』は二十七年の刊行ですが、同じく香取秀真が大正五年に発行した『日本金燈籠年表』には

厳有院廟銅燈臺（今在大倉美術館）
同上 （今在芝今村氏）
常憲院廟銅燈臺（今在大倉美術館）

延寶九、五 宇田川藤四郎次重
同上 松田勘平栄清
寶永六、正 宇田川藤四郎重次



写真8 三田今村邸

と有ります。
今村繁三は（1877～1956年）今村銀行の二代目頭取で実業家。岩崎小弥太等とともに成蹊大学の前身となる成蹊園の設立にも関わりました。別荘は国分寺の現在の日立中央研究所の地に構えていましたが、芝区田町（今の港区三田）にジョサイア・コンドルの設計による本邸が有り、どうやらその前庭に厳有院の銅灯籠が置かれていたようです。『コンドル博士遺作集』には、この三田の今村邸の写真が残されていますが、残念ながら灯籠は写っていません。
洪沢栄一記念財団のデジタル版『洪沢栄一伝記資料』には次の記載があります。

財団法人修養団後援会書類

修養団後援会招待芳名
芝区田町七ノ六

今村繁三

（洪沢子爵家所蔵）

香取秀真は大正五年にはその所在または情報を確認していた様ですが、戦後の昭和二十七年には恐らく所在の確認が出来ずに、前記のような曖昧な記述になった物と思われます。今村繁三は昭和の恐慌の中で芝高輪の屋敷を処分し、吉祥寺に移り戦後は下落合で文化人たちの支援をしながら没することになります。銅灯籠のその後の行方は判りません。
一方大倉美術館（現大倉集古館）の二基の銅灯籠は現在も残っています。『大倉集古館列品要略』には次の様な記載があります。

三三六八、銅燈臺 二基

第一號館の正面・入口車寄の左右に樹てる銅燈臺二基、其の一基は、延寶九年（此の年九月廿九日、天和と改元、皇紀二三四一、西暦一六八一）五月八日に、江戸上野なる四代將軍嚴有院殿の靈廟に奉獻せられたるもの、一にて、他の一基は、寶永六年（皇紀二三六九、西暦七〇九）正月十日に同所なる、五代將軍常憲院殿の靈廟に奉納せられたるもの、一也、斯の種の銅燈臺は、舊と、上野なる各將軍の廟前に、多數、獻納せられたるものなる可しと雖、維新後、或は迭出し、或いは鎔敗せられて、今日に在りては、我が大倉集古館内に、漸く其の二基を留むるに過ぎざるは、憾みとす可き也。左に兩燈臺の鐫銘を録せむ。曰く、

「奉獻嚴有源公靈廟前庭 銅燈臺貳樹

廷寶辛酉五月八日 參議從三位兼行右近衛權中將光國肅具

冶工 宇田川藤四郎次重

「奉獻 常憲源公靈廟前庭 銅燈臺二樹

寶永六年己丑正月十日 權中納言從三位源綱條肅具

冶工 宇田川藤四郎重次

銅燈籠に関して、此の残された一基から献納の実態を追いかけていくことは不可能です。しかし、嚴有院廟に残された石灯籠の情報と文献から得られる情報を整理して出来るだけ全体像に迫ってみたいと思います。

まず嚴有院仏殿唐門前の御三家の灯籠配置について考えてみたいと思います。

今村邸の銅灯籠の銘は

紀伊國主正三位行權中納言源光貞

大倉集古館前の銅灯籠の銘は

參議從三位兼行右近衛權中將光國

これに対して尾張家の徳川光貞の延寶八年当時の官位は正三位行權中納言で承応二年八月十二日の任官になります。徳川光貞の任官は寛文九年正月十



写真9 大倉集古館前の銅燈籠

日で、前任順、官位の高低から言えば徳川光貞（尾張）―徳川光貞（紀伊）―徳川光圀（水戸）となります。綱吉は御三家と共に、祥月命日に当たる天和元年五月八日に嚴有院靈廟に詣で拝礼しますが、『常憲院殿御實紀』によればこのときの御三家の拝礼順は

○八日東叡山の 靈廟に御詣あり。（中略）御拜畢り。尾張中納言光友卿。紀伊中納言光貞卿。水戸宰相光圀卿。尾張中將綱誠卿。紀伊中將綱教卿。水戸少將綱條朝臣陪拝あり。

となります。因みに此の時点での御三家嫡子の官位は

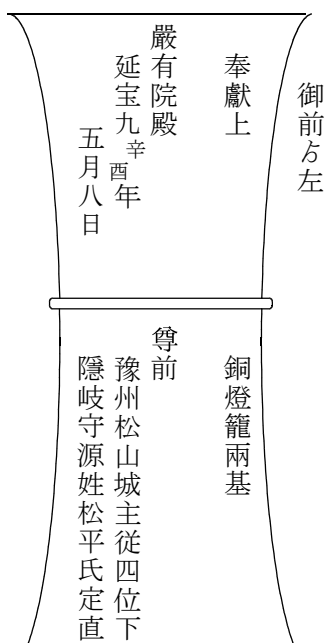
徳川綱誠（尾張）從三位右近衛權中將（寛文三年十二月二十七日）

徳川綱教（紀伊）從三位左近衛權中將（延寶四年十二月二十五日）

徳川綱條（水戸）正四位下左近衛權少將（寛文十一年十二月二十五日）

です。この官位の順に従えば、銅灯籠の配置は唐門を挟んで内側から尾張―紀伊―水戸の順になって居ると考えられます。

東京都立中央図書館所蔵の『木子文庫』に『嚴有院殿奉獻燈籠』という史料があります。折り本の形式で、一頁に一大名ずつ銘文が記載されています。最初の頁だけ模刻してみますと次のようになります。（東京都立図書館のTOKYOアーカイブで画像を確認できます）



このような形で秋田城主佐竹義處まで六大名分の銘が描かれています。その後の姫路城主松平直矩から毛利綱廣まで五大名分は中節より上の部分の銘文が省略されています。更に出雲侍從松平綱近から細川綱利までの四大名分は銅灯籠の輪郭線も省かれてしまっています。

かれています。
しかし残念ながらここまでです。

奉獻石燈籠一基

東叡山

嚴有院殿

延宝九年^{辛酉}五月八日

尊前
從五位下九鬼和泉守藤原隆俣

奉獻上

武州東叡山

嚴有院殿

延宝九年^{辛酉}五月八日

尊前
從五位下六郷佐渡守
藤原政信

奉獻 石燈籠

兩基
武州東叡山

嚴有院殿

延宝九年^{辛酉}五月八日

尊前
越後長埜城主從五位下

源朝臣牧野駿河守忠郷（忠辰）

豊前中津城主小笠原信濃守源姓長隆

延宝九年^{辛酉}五月八日

嚴有院殿

東叡山

奉獻石燈籠 兩基

奉獻上石燈籠兩基

東叡山

嚴有院殿

延宝九年^{辛酉}五月八日

尊前
從五位下

加藤遠江守藤原泰經

ここに記録された五つの石灯籠のうち、最初と最後の灯籠は現物が確認されています。最初の九鬼和泉守の灯籠は川崎市の龍巖寺に残されています。

奉獻石燈籠一基

東叡山

嚴有院殿 尊前

延寶九 歳五月八日

從五位下九鬼和泉守藤原隆律



名前の部分が少し読みづらいのですが寛政譜に従えば「九鬼和泉守藤原隆律」となります。「律」の字を「俣」と書いていますが、微妙なところですよ。加藤遠江守泰經の灯籠に関しては、板橋区立郷土館に一基残っています。銘文を比べてみれば一致していますので、かなり正確に写し取られていたことが判ります。『木子文庫』の寛永寺関連の資料は大工棟梁甲良家伝来のものが含まれていますので、『嚴有院殿奉獻燈籠』も或いは大工頭鈴木修理を通じて諸大名から依頼された灯籠分について記載しているのかもしれない。銅灯籠の最初の五基分には「御前左左」、「御前右右」と位置を示す書き込みがありますので現場で写し取られた物に違いありません。

銅灯籠の輪郭図の宇和嶋城主伊達遠江守宗利の図の左上には「高サ貳尺壹寸六分」の書き込みがあり、次の備前侍從源朝臣綱政の図の右上には「差渡三尺五寸五分」と有ります。竿の寸法を表した物と思われれます。

同じ『木子文庫』に「上野常憲院様御佛殿唐銅御燈籠之圖」が納められています。その図の竿の部分にも「高サ貳尺壹寸六分」「差渡三尺五寸五分」との寸法書きがあります。ここでも石灯籠と同じく模刻図を掲げておきます。石灯籠と同じく、同じ規格で銅灯籠が作製されていたことを窺わせます。

ところで前に石灯籠を模刻したときには考えてもみななかったのですが、今改めて木子文庫の『嚴有院殿奉獻燈籠』を見ながら、石灯籠図、『唐銅燈籠之図』を眺めてみると、これらの図が常憲院靈廟へ献納する灯籠の指図図面として作られたことが推測できますが、描かれた灯籠は実際に嚴有院へ献納

唐銅燈籠之圖

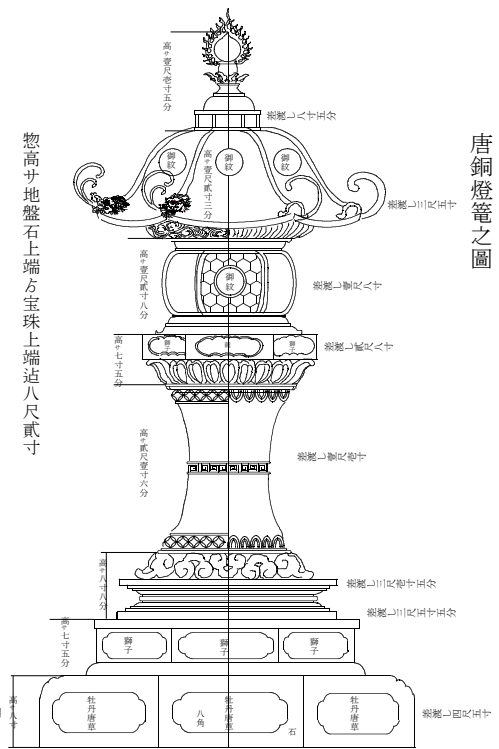


図3 木子文庫銅燈籠図02

唐銅燈籠之圖

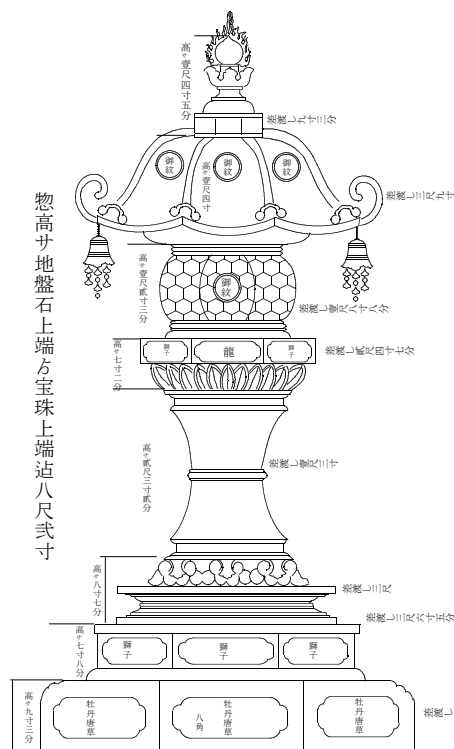


図4 木子文庫銅燈籠図 14

になって描かれています。また地盤石の格狭間の獅子と底石の格狭間の牡丹唐草もやはり簡単なスケッチとして書き込まれています。寸法書ですが、03では笠の寸法以外は書き込みがありません。13と14には書き込みが有りますが微妙に違いがあります。面白いのは系列の違う絵図と思われる02に書き込まれた寸法と一ヶ所を除いてほぼ一致することです。違いは火袋の寸法で、高さは老尺貳寸八分で一緒ですが、差渡しは02が老尺八寸ですが、14では老尺壹寸となっています。

納された灯籠の物と考えられます。『唐銅燈籠之図』は全部で四枚（木 010-3-02, 03, 13, 14）残されていて、そのうち03、13、14は外形がほぼ一致します。というよりは、三枚を重ね合わせてみると上からなぞり書きをしたように線が重なり合います。細かい違いと言え、13の笠、中台に付けた御紋が三つ葉葵の紋になっているのと、中台格狭間の獅子、龍が簡略な絵

細かい数字の話を持ち出しても疲れてしまいますから、ここでは幾つかのスケッチを元に各部材の寸法が収斂されていくことが見て取れば良いと思います。

ここまで長々と史料を辿ってきて、やっと話の道筋を提示できそうです。九州国立博物館の『対馬宗家文書データベース』の中に銅灯籠の献上に關して二通の文書が有ります。宗對馬守宛ての老中奉書ですが、

東叡山

有徳院様御靈前江
銅燈籠可被献上候
寸法之儀者
常憲院様御佛殿江
被獻候通可被心得候
右来年二月上旬迄出来候様
可被致候以上
八月

もう一通は

増上寺
惇信院様御靈前江
銅燈籠可被献上候
寸法之儀者
有章院様御佛殿江
被獻候通可被心得候
右来年二月上旬迄
出来候様可被致候
以上
八月

有徳院徳川吉宗が寛延四年六月二〇日、惇信院徳川家重が宝曆十一年六月十二日に薨去していますから、灯籠献納のスケジュールも翌年の二月と同じになり、従って文面も殆ど変わるところが有りません。ここでは二つの事が判ります。石灯籠と同じく銅灯籠に關しても寸法に關しての指示が有ったこと、そしてもう一つは、大猷院廟には石灯籠を献上していた對馬の宗家は銅灯籠を献上していることです。

もう一度『嚴有院殿奉獻燈籠』に書き出されている諸大名のうちで大猷院廟に石灯籠を献納した大名の名前を挙げてみましょう。

○美濃大垣城主 戸田氏西

○宇陀侍従 織田山城守平長頼

○宇和嶋城主 従四位下侍従 伊達遠江守宗利

従四位下侍従或いは従四位下の家格の大名が石灯籠では無く銅灯籠の献納を行っていることが判ります。つまり大幅に銅灯籠献納大名の数が増え、今まで銅灯籠の献納という形で鋳物師と繋がったことのない大名が銅灯籠の献納を迫られたこととなります。これらの大名を扶助して確実に銅灯籠の献納を行わせるために、銅灯籠の意匠を規格化する事が求められた物と思われる。

『鹿鳴館秘蔵写真帖』の嚴有院廟銅灯籠を写した写真をもう一度見て頂くと、燈籠の高さがほぼ均整が保たれていることが判ります。



写真 10 皇嘉門前灯籠



写真 11 上野東照宮

高さという面で見ると、日光大猷院廟に献納された銅燈籠も、御三家灯籠を除けばほぼ揃っています。違うのは、意匠です。典型的なのが皇嘉門前左右に献納された酒井讃岐守忠勝の銅燈籠です。酒井忠勝は日光大猷院靈廟造営の惣奉行を務めた大名ですが、その煌びやかさは他の灯籠に抜きん出ています。慶安四年に上野東照宮に献納された灯籠群と比べてみますと同じような意匠を踏襲しながら細部の装飾にこだわりが見受けられます。因みに写真右側の竿部に髷のような突起部を並べた燈籠は加賀の前田家の灯籠です。日光大猷院廟唐門前左側に並んだ御三家灯籠と左端に見えるのが前田家の灯籠です。写真に残された嚴有院灯籠を見る限り、御三家灯籠の形が基本形になっ



写真 12 日光大猷院廟拝殿前



写真 14 上野東照宮



写真 13 日光大猷院

ていると思われます。

前に述べましたように日光大猷院廟で石灯籠二基を献納していた従四位下侍従の大名は嚴有院廟では銅灯籠を献納することとなり、これに合わせて上野の東照宮、日光大猷院廟で特徴的であった石灯籠の意匠が無くなります。

嚴有院靈廟は日光大猷院廟と比べて構造自体も大きく変わっています。日光大猷院廟は日光東照宮に添うように山岳の地形に営まれていたもので、灯籠の配置にも苦心と配慮が窺えます。嚴有院廟は台地部を均して造営されましたが、勅額門を挟んで配置された灯籠は江戸城内の御殿格式を反映して均整のとれたものになりました。その為には津軽藩のように先例を楯に、より上の格式の献納数を獲得しようとする大名の要求を退けて、同じ基準の下に献納すること

を要求します。津軽藩の例で、灯籠献納までの

奉獻 日光山 石燈籠兩基

大猷院殿

兼應二巳年四月二十日

従四位下行侍従伊達遠江守

藤原朝臣秀宗

幕府との遣り取りを紹介しましたが、『相馬藩世紀 第一』（平成十一年続群書類従完成会）の中にも次の様な記述が有りますので掲げておきます。

延宝八年十一月

一、廿四日 嚴有院様御廟前江被獻候石燈籠ノ書付、
御老中大久保加賀守殿方被相出、

- 一、石燈籠 二基
一、地盤石、高サ地ヨリ七寸、指渡四尺六寸
一、地盤石、上端ヨリ寶珠迄九尺壹寸八分、

天和元年

一、四月四日、上野御廟前江石燈籠獻立奉行石
川彌助

三月二十七日に津輕藩、二十八日に小田原藩、四月四日に相馬藩ですから、石燈籠、銅灯籠を問わず準備の整った順に靈廟内に運び込まれていったものと思われる。

6 奥院銅燈籠

次に奥院銅灯籠について考えてみたいと思います。

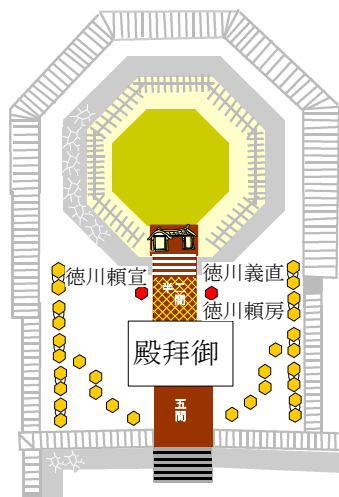


図5 台徳院奥院前灯籠配置図

図5は増上寺台徳院奥院の銅灯籠配置図です。便宜的に御三家の配置のみ示していますが、黄色で表している燈籠は全て献納者名が判っています。しかし赤色で表している灯籠は献納者名が記載されていません。

次に日光大猷院廟の奥院の灯籠配置を見えます。

奥院皇嘉門前に酒井讃岐守忠勝の銅灯籠が献納されていることは前に書きましたが、奥院拝

殿にも三対の銅灯籠が配置されています。

長年、鋳物師の側面から銅灯籠を追いつけてきた石塚雄三氏は『徳川靈廟奉献銅燈籠の謎』の中でこの三対の銅灯籠の内二対について

ここで大猷院奥の院三対の燈籠の残る謎について考察する。
まず奉納者についてであるが、元日光山輪王寺に居られた大久保忠政氏

が戦後に書かれた文書によると奉納者は

式の燈籠 甲府様

参の燈籠 館林様

であることが判っている。甲府様とは家光公の三子で甲府宰相綱重公、また館林様とは四子の後の五代將軍徳川綱吉公であろう。とすると「壺」の燈籠の奉献者は、大久保氏は書いて居られないが、家光公の長子で四代將軍家綱公であることが推察される。

と書いて居られる。この評価については後に書くことにしますが、『上野東叡山燈籠建場圖』で見ることの出来る常憲院廟奥院にはこの様な無銘の銅灯籠は存在しません。続く文昭院廟でも同じです。果たしてこの無銘の銅灯籠は誰によって、どのような意図で献納された物なのでしょうか。又嚴有院廟奥院にもこの様な無銘の銅灯籠は存在したのでしょうか？

多くのことが判っているわけでは有りませんが、判ることから書いてみることにします。

『本光国師日記』には台徳院靈廟造営の際、石灯籠の配置について土井大炊頭利勝からお尋ねが有り、直ちに松平右衛門大夫正久、林道春（羅山）、弟の林永喜と同道してお城へ出向き案を申し上げたと有ります。

一同日（十七日）。土大炊殿。從 御城直に御出、松右衛門殿。道春。永喜同道也。増上寺へ今度諸大名。各石燈籠御寄進立所何様に可然哉。可申上由、則書付上ル。案在左。

石燈籠可被成御立所之覚

一 御廟所之廻りに御連枝衆。其外ちかき御一門方并つね／＼に御前ちかく御奉公被致候衆之石燈籠可被成御立敷。

一 御佛殿之御前に。官位高き大名衆。其外國持衆。それより次第々々に御立可被成敷。以上

お尋ねは石灯籠の配置としていますが、答えの内容からすると銅・石灯籠の配置全体に対する物と考えられます。ここでは無銘の灯籠に関する情報は有りません。ここでの御連枝衆は御三家や越前家を指していると思われる。仮に石塚氏が指摘する様に大猷院廟の三対の銅灯籠が家光の三人の男子である家綱、綱重、綱吉だとすると、先例となる筈の台徳院秀忠にはこの時家光、忠長の二人の男子が居たのに一対しか納められていません。まして次期將軍が献納しているので有れば、灯籠の配置については、次期將軍の灯籠を

中心に配置案が語られなければならないのに、考慮している様子は見られません。

寛永寺元執事長の浦井正明氏は『上野寛永寺將軍家の葬儀』の中で

注目すべきことは、十五日に百カ日忌の法要が済み、今日（十六日）、贈位・増官の勅使が下向來山するまでの間、嗣君の家宣はただの一回も法要に姿を見せていないのである。これは、前にもふれたように、おそらくは綱吉の死を穢れと考え、それが家宣に移ることを恐れていたからだと思われる。

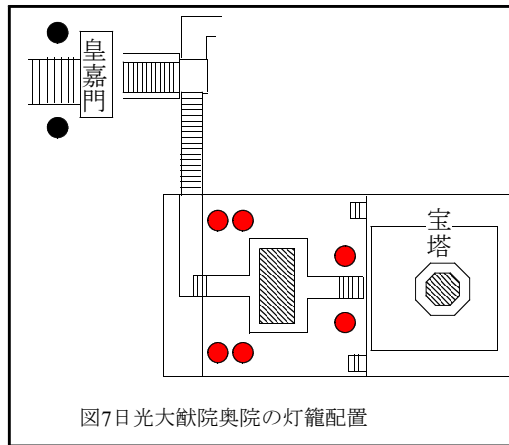


図7 日光大猷院奥院の灯籠配置

と書かれています。私はこの見解が全てだろうと思っています。後継將軍に死の穢れが及ばないために百カ日忌の法要が済むまでは、法要の場から遠ざけ、名を刻むことも忌み嫌ったものと思われる。

厳有院廟造営時には養子となつた綱吉には徳松という実子が居ましたので、この時点では兄の子で在る甲府宰相徳川綱豊は単に最も血の近い親族という立場に過ぎません。従つて石塚氏の説に従えば、実子である綱吉だけが奥院に灯籠を献納したことになります。

將軍綱吉の子徳松は早逝し、綱豊を養子としたので、徳川宗家を継ぐ者はこの家宣以外には居なくなりま。家宣には清武という弟が居るのですが、越智家に入つて松平姓を名乗っていますので、現將軍の御舎弟として奥院に灯籠を献納する資格を持つ者は誰も居ないことになります。因みに清武は常憲院勅額門内に銅灯籠を一基献納しています。

常憲院、文昭院の靈廟奥院前に灯籠が無かつたことは残された灯籠配置図によつて判つています。台徳院廟の場合には先に書きましたように、灯籠の数が後継者の数と合いません。とすれば、大猷院靈廟奥院にだけ無銘とは言え形代のように灯籠を築くと言うことがあつたのでしょうか？

石塚氏が言う、輪王寺の大久保忠政氏の記述とは、私の知っている限り、大猷院燈籠配置図への書き込みを指していると思われま。ここには名前の

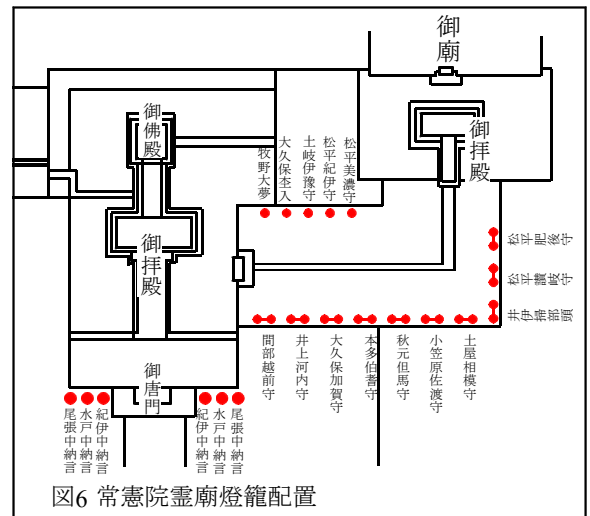


図6 常憲院靈廟燈籠配置

とは無かつたと思われる。

7 大名格式と灯籠献納数

最後に前回紹介した現存する厳有院石灯籠のデータを追捕した表を掲げてみます。更にこのデータを大名の領地高によつて造り直してみた物が表2です。基数の項で「未詳」とあるのは、未調査の為献納大名銘は判明していても基数の確認が出来ない物です。また木子文庫の『厳有院殿奉獻燈籠』の記述から三基分を採用しています。

銘文記載	大名数	合計基数
両基	21	29
一基	46	46
無記載	24	24
剥落	3	3
未詳	3	3
	97	105

表1 厳有院石燈籠現存基数

この表に見る限り、石灯籠を献納した大名の中に十萬石以上の大名は一例も見られません。また五萬石を境に献納数が一基から二基に増えていることも確認できます。

灯籠の確認数から考えれば、日光大猷院廟において石灯籠を献納していた十萬石以上の大名が、表の中に現れてこないのはこれらの大名が石灯籠以外の献納物つまり銅灯籠を献納したと考えた方が良くということになります。

これで先に紹介した従四位下侍従の家格を持つ大名に加えて、十萬石以上の大名が銅灯籠を献納する資格

書き込みが有るだけで、それ以上の記述は有りません。「壺」の燈籠に関しては何も記載されていません。後継將軍で有る家綱の灯籠であると言ふことは、おそらく寺院内部の伝承としても無かつたのではないかと思います。

ついでに書いておきますと、石塚氏は大杉神社に有る銅灯籠を寛永寺大猷院廟に献納された家綱の灯籠とされています。大杉神社の銅灯籠が、寛永寺大猷院廟から移された物で有るのは間違いないのですが、寛永寺大猷院廟には元々奥院は無いので、恐らく日光大猷院廟のように無銘の灯籠（嗣子の灯籠）が献納されるこ

を持った物と思われます。

姓名	藩名	領知高	基数	内田正衆	下野鹿沼藩	15,000	壹基	永井直種	摂津高槻藩	36,000	一基
小笠原真方	小倉新田藩	10,000	無	阿部正春	上総大多喜藩	16,000	一基	金森頼時	飛騨高山藩	39,000	無
織田長明	大和芝村藩	10,000	無	大久保教寛	駿河松長藩	16,000	剥落	小笠原長祐	三河吉田藩	40,000	無
加藤直泰	伊豫新谷藩	10,000	無	市橋政信	近江仁正寺藩	17,000	一基	本多重益	越前丸岡藩	43,300	無
加藤明友	石見吉永藩	10,000	無	大關増栄	下野黒羽藩	18,000	一基	土屋政直	常陸土浦藩	45,000	一基
西郷延員	安房東条藩	10,000	一基	丹羽氏明	美濃岩村藩	19,000	無	毛利元賢	周防徳山藩	45,000	一基
佐久間勝豊	信濃長沼藩	10,000	一基	九鬼隆常	丹波綾部藩	19,500	無	青山幸利	摂津尼崎藩	48,000	一基
新庄直詮	常陸麻生藩	10,000	無	稲垣重昭	三河刈谷藩	20,000	一基	青山忠雄	遠江浜松藩	50,000	兩基
高木正豊	河内丹南藩	10,000	一基	酒井忠寛	上野伊勢崎藩	20,000	無	浅野長矩	播磨赤穂藩	50,000	兩基
立花種長	筑後三池藩	10,000	一基	内藤政親	陸奥泉藩	20,000	一基	浅野長照	備後三次藩	50,000	兩基
谷衛広	丹波山家藩	10,000	一基	那須資弥	下野烏山藩	20,000	無	有馬永純（清純）	日向延岡藩	50,000	二基
一柳直治	伊豫小松藩	10,000	無	南部直政	陸奥八戸藩	20,000	一基	板倉重常	伊勢亀山藩	50,000	兩基
一柳末禮	播磨小野藩	10,000	一基	堀親貞	信濃飯田藩	20,000	一基	井上正任	常陸笠間藩	50,000	兩基
本多忠晴	三河伊保藩	10,000	一基	松平正信【大河内】	相模玉縄藩	20,000	壹基	久世重之	下総関宿藩	50,000	兩基
本多忠利	三河挙母藩	10,000	一基	毛利高重	豊後佐伯藩	20,000	一基	水谷勝宗	備中松山藩	50,000	兩基
前田利意	上野七日市藩	10,000	一基	六郷政信	出羽本荘藩	20,000	無	溝口重雄	越後新発田藩	50,000	兩基
牧野康道	越後与板藩	10,000	一基	分部信政	近江大溝藩	21,000	一基	本多利長	遠江横須賀藩	50,000	兩基
松平直堅【越前】	越前糸魚川藩	10,000	一基	松平近陣【大給】	豊後府内藩	21,200	無	松平康官【松井】	石見濱田藩	51,000	兩基
森川重信	下総生実藩	10,000	一基	松平信興【大河内】	常陸土浦藩	22,000	一基	太田資次	大坂城代	52,000	兩基
柳生宗在	大和柳生藩	10,000	一基	榑村家貞	大和高取藩	22,000	一基	脇坂安政	播磨竜野藩	53,000	剥落
屋代忠位	安房北条藩	10,000	剥落	相良頼喬	肥後人吉藩	22,100	一基	安藤重博	上野高崎藩	60,000	兩基
山口重定	常陸牛久藩	10,000	壹基	小笠原貞信	越前勝山藩	22,700	一基	加藤泰恒	伊豫大洲藩	60,000	兩基
酒井忠貞	安房勝山藩	10,000	無	遠藤常春	美濃郡上藩	24,000	一基	松平光永	美濃加納藩	60,000	未詳
伊東長貞	備中岡田藩	10,343	一基	木下公定	備中足守藩	25,000	一基	京極高豊	讃岐丸亀藩	61,500	未詳
栗山一伊	大和新庄藩	11,000	一基	木下俊長	豊後日出藩	25,000	一基	松浦鎮信	肥前平戸藩	61,700	未詳
大田原典清	下野大田原藩	11,400	無	土岐頼殷	出羽上山藩	25,000	一基	松平忠房	肥前嶋原藩	65,900	兩基
小堀政恒	近江小室藩	11,460	壹基	大村純長	肥前大村藩	27,900	無	内藤義頼(頼長)	陸奥磐城平	70,000	兩基
京極高明	丹後峰山藩	11,600	無	真田信利	上野沼田藩	30,000	一基	水野忠直	信濃松本藩	70,000	兩基
土方雄豊	伊勢菟野藩	12,000	一基	堀直利	越後村松藩	30,000	無	中川久恒	豊後岡藩	70,000	兩基
片桐貞房	大和小泉藩	12,400	一基	牧野成貞	常陸・下総・下	33,000	一基	阿部正邦	丹後宮津藩	73,600	兩基
久留嶋通清	豊後森藩	12,500	一基	松平定陳【久松】	伊豫今治藩	35,000	無	牧野忠辰	越後長岡藩	74,000	兩基
松平重治【能見】	上総佐貫藩	14,500	無	井伊直武	遠江掛川藩	35,000	無	小笠原長勝	豊前中津藩	80,000	兩基
板倉重形	上野安中藩	15,000	無	九鬼隆律	摂津三田藩	36,000	一基				

表2 銘の判明している厳有院灯籠一覧（基数欄は銘文記載の基数）

つまり灯籠配置をも含めた霊廟の構造に関しては、余り大きな変更を必要としなかったことを示しています。
では何が大猷院廟と違って居たのでしょうか？私は寛文印知により大名の領地高が公認されたことが大きな要素になって居ると思います。寛文印知により領地高を元に大名の格式が確定していく基礎が築かれました。この大名格式は、徳川家宣の代になって一万石以上の大名を諸大夫と認めたことにより完成したと考えられています。

（2021.4.25）

従来『上野東叡山燈籠建場図』によって、常憲院廟以降大名の格式による献納灯籠の差別化が行われたと考えてきましたが、これらの差別化は既に厳有院廟の灯籠配置において行われていたと考えられます。

ここで注目したいのは、厳有院廟と常憲院廟の配置です。御廟の配置が何れも御佛殿の右奥に在るのを除けば大まかな配置はほとんど左右対称です。